



Title	学校と家庭の連携に関する教育社会学的研究―社会経済的に厳しい公立小学校における教師の認識と実践―
Author(s)	山口, 真美
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/92924
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (山 口 真 美)

論文題名

学校と家庭の連携に関する教育社会学的研究
—社会経済的に厳しい公立小学校における教師の認識と実践—

論文内容の要旨

本研究の目的は、社会経済的背景の厳しい校区の小学校における、学校—家庭連携の諸相と教師・保護者の認識を明らかにすることである。近年、学校—家庭の関係、教師・保護者の役割が問い直されている時代という背景のもとに、その問題が先鋭化しやすいと考えられる対象校にて質的調査を行い、教師の仕事と子どもへの支援の今後の在り様を考察した。本研究の中心的な問いは「社会経済的背景の厳しい学校における学校—家庭連携はどのようなものか」であり、この研究課題に対して、学校—保護者連携における教師と保護者の関係、学校—保護者連携における教師の実践、教育実践に対する学校区の影響という3つの検討課題を設定した。

第2章では、学校—家庭連携のローカルな在り方を浮き彫りにする本研究の調査の概要を述べたのちに、社会経済的に厳しい校区に位置する対象校の教育実践への影響を検討する前段階として、校区の変遷や住民構成の変化と現在の状況を描いた。事例校は高度経済成長後の団地の変遷と軌を一にしており、学校創立から児童数が急増した時期、経済不況と子どもたちの荒れが重複した時期、団地の少子高齢化の一方で宅地開発が進み住民が多様化した時期の3つに時期区分を経たうえに現在の学校の文化・取り組みがあることを確認した。そのような学校において教師が保護者をどうまなざしているかを第3章で検討した。従来、対立的であると指摘されてきた教師の保護者に対する見方とは異なる共感的な認識を成立させる要素を、情緒的地形という概念を援用して明らかにした。

第4～6章では、事例校において連携として求められる具体的な事柄（生活集団、登校、宿題、忘れ物）を材料に、学校側が期待する役割を果たすことが難しい家庭もあるなかで、教師がそうした家庭の保護者と子どもにどのような認識で、いかなる実践を行っているかを検討した。第4章では、教師から保護者に日常的に伝えられるメッセージを読み解くために、子ども・教師・保護者をつなぐメディアの一つである文書、特に学級通信の実践に着目し、計量テキスト分析を行った。その結果、学級通信は子どもの学校での様子を知りたいという保護者のニーズに合致したメディアとなっており、その一方で子どもの学校生活を支えるために保護者へ多量の要望が伝えられていることが明らかになった。次に第5章では、学校からの「期待」に沿えない家庭に対して、教師らがどのような認識と論理で以て、個別に対応しているのかを描いた。教師らは「どこまでを学校が担うべきか」という境界線を巡る葛藤を抱きつつも子どもたちが授業に参加できるようにするために実際にはその役割を学校側で補完している面があった。さらに第6章では、指導が困難である等、学校の文脈に応じて加配されている教師の仕事についてその詳細を明らかにした。児童生徒支援加配の教師は、児童の社会的出自や家庭状況によらず、登校が困難な状況にある子どもすべてを支援対象とし、支援の中核を担っていた。その仕事内容からは「学習以前」への対応が集積していると考えられ、それを教師が担う意義は授業づくり・学校づくりを通して教育実践における問い直しを行えることだと指摘した。

本論最後の第7章では、特定の学校の教育実践を保護者らがどのように受け止めているのかを、居住地の異なる保護者11名へのインタビューから検討した。総じて保護者らは子どもの支援につながる連携の取り組みに賛同するとともに、その補完的な実践を高く評価していた。また、学校の様子や情報の共有・開示、我が子への学校生活・学びへの個別追加的な支援を行う教師を起点として、学校を信頼している状況が明らかになった。

終章では、学校と教師が担うべき役割の再検討について論じ、学術的インプリケーションとして「日常世界の学校—家庭連携への注目」「学校と家庭の役割と教師の専門性」を、実践的インプリケーションとして「教師の自律性の確保」「保護者支援の位置づけ」「社会経済的不利益層への着目」を提起した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (山 口 真 美)			
論文審査担当者	(職)		
	氏 名		
	主 査	教授	志水 宏吉
	副 査	教授	高田 一宏
	副 査	教授	稲場 圭信
論文審査の結果の要旨			
本研究の目的は、社会経済的背景の厳しい校区の小学校における、学校一家庭連携の諸相と教師・保護者の認識を明らかにすることである。序章では、この課題に対して、学校一保護者連携における教師と保護者の関係、学校一保護者連携における教師の実践、教育実践に対する学校区の影響という3つの検討課題を設定した。 第2章では、校区の変遷や住民構成の変化と現在の状況を描いた。事例校は高度経済成長後の団地の変遷と軌を一にしており、学校創立から児童数が急増した時期、経済不況と子どもたちの荒れが重複した時期、団地の少子高齢化の一方で宅地開発が進み住民が多様化した時期の3つに時期区分を経たうえに現在の学校の文化・取り組みがあることを確認した。 それに続く第3～第7章では、事例校における連携のあり方について考察した。 第3章では、連携として求められる具体的な事柄（生活集団、登校、宿題、忘れ物）を材料に、学校側が期待する役割を果たす難しい家庭もあるなかで教師がそうした家庭の保護者と子どもにどのような認識で、いかなる実践を行っているかを検討した。 第4章では、教師から保護者に日常的に伝えられるメッセージを読み解くために、子ども・教師・保護者をつなぐメディアの一つである文書、特に学級通信の実践に着目し、計量テキスト分析を行った。 第5章では、学校からの「期待」に沿えない家庭に対して、教師らがどのような認識と論理で以て、個別に対応しているのかを描いた。 さらに第6章では、指導が困難である等、学校の文脈に応じて加配されている教師の仕事についてその詳細を明らかにした。 最後に第7章では、特定の学校の教育実践を保護者らがどのように受け止めているのかを、居住地の異なる保護者11名へのインタビューから検討した。総じて保護者らは子どもの支援につながる連携の取り組みに賛同するとともに、その補完的な取り組みを高く評価していた。 終章では、学校と教師が担うべき役割の再検討について論じ、学術的インプリケーションとして「日常世界の学校一家庭連携への注目」「学校と家庭の役割と教師の専門性」を、実践的インプリケーションとして「教師の自律性の確保」「保護者支援の位置づけ」「社会経済的不利益層への着目」を提起した。 本論文が扱っている学校と家庭の連携というテーマは、教育社会学という学問分野において伝統的に扱われてきたものであるが、時代の変化とともにそのあり方は大きく変容しつつある。社会経済的背景が厳しい地域に位置づく公立小学校を対象としてその現代的ありように切り込んだ本研究は、これまで見過ごされてきたいくつもの事柄に対して新たな光を当てるものであり、そこで見出された知見は多くの学問的・実践的示唆に富むものとなっている。 以上のことから、本論文は博士（人間科学）の授与にふさわしい内容を十分に備えていると判断する。			